



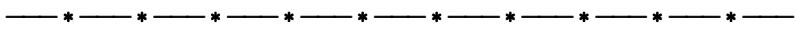
Data

監督：ダニエル・エスピノーサ
 出演：デンゼル・ワシントン／ライアン・レイノルズ／ヴェラ・ファーミガ／ブレンダン・グリーソン／サム・シェパード／ルーベン・ブラデス／ノラ・アルネゼデール／ロバート・パトリック／リーアム・カニンガム／ファレス・ファレス

👁️👁️ みどころ

『マルコムX』（92年）を代表作として、若い頃から重厚な演技が光っていたデンゼル・ワシントンも今や凄みのあるワル役がピタシ？そんな発想で彼が本作に登場したが、「師弟モノ」になると主演はどちらに？

CIAモノは数多いが、本作のミソはセーフハウスなるものと、その管理人というキャラ。そして、師匠がワル＝裏切り者ということだ。いろいろな設定が想定内のところがイマイチだが、トータルとしてのまとまりは十分楽しめる・・・。



■□ 「師弟モノ」に新たな名作が！ ■□

潜水艦モノや密室モノには名作が多いが、「師弟モノ」にも名作が多い。まず、『スパイ・ゲーム』（01年）はロバート・レッドフォードとブラッド・ピットというハリウッドを代表する二枚看板が、CIAエージェントの師弟としての持ち味を出し切ったスリリングな傑作だった（『シネマルーム1』23頁参照）。また、『トレーニングデイ』（01年）はデンゼル・ワシントンがロス市警の麻薬捜査官チームの長として、イーサン・ホーク扮する新米刑事に対して悪ぶりを発揮する名作だった（『シネマルーム1』14頁参照）。これに対して、『アンストッパブル』（10年）は、ベテラン機関士に扮するデンゼル・ワシントンが新米車掌と共に大活躍する大活劇だったが、ちょっと単純すぎてイマイチ（『シネマルーム26』未掲載）。若い頃のデンゼル・ワシントンは『グローリー』（89年）でも、『マルコムX』（92年）でもすばらしくカッコいい若者だったが、『トレーニングデイ』以降はもっぱら先輩役、師匠役に定着？

しかして本作は、長年勤めたCIAという組織のウソと裏切りそして権力欲の世界に嫌

気がさし、今は国家機密の密売者になり果てた元CIA諜報員トビン・フロスト役をデンゼル・ワシントンが存在感タップリに演じている。しかし、そんな「裏切り者」を師匠に持つ弟子は一体ダレ？『トレーニングデイ』の師匠は一応形式的には麻薬捜査官のボスだったが、CIAの新米諜報員マット・ウェストン（ライアン・レイノルズ）がフロストのような裏切り者を師匠にしなければならないとしたら、弟子は大変・・・？

■□■「セーフハウス」とは？原題の方がベターかも？■□■

CIAを描いた映画は多いが、CIAの中にあるという「セーフハウス」とは一体ナニ？CIAの諜報網は全世界に張りめぐらされているが、諜報員たちがどこで活動するについても、必要なのは活動の拠点と、万が一の場合の隠れ家。活動の拠点は任務に応じて設定すればいいが、逃げ隠れする必要が生じた時は「CIA諜報員様ご用達」の隠れ家が不可欠。それが全世界に張りめぐらされている「セーフハウス」だ。『ボーン』シリーズのジェイソン・ボーンのように全世界を股にかけて派手な活躍をするのがCIA職員なら、このセーフハウスの管理人も同じCIA職員。もっとも、前者は命も危険にさらす華やかな諜報員だから給料も高いが、セーフハウスの管理人はいわばマンションの管理人と同じだから安月給であるうえ、そこに配置されているのは出来の悪い人材ばかり。本作導入部に登場するマットを見ていると「なるほど、そのとおり」と思えてくる。

CIAの職員が恋人や妻にもその身分を明かせないことは、『Mr. & Mrs. スミス』（05年）を観れば明らかだ（『シネマルーム9』82頁参照）が、マットがフランス人医療研修医である恋人のアナ・モロー（ノラ・アルネゼデーレ）に対して「自分はNGOで働いている」とウソをつけるのも今のうち。マットが願うようにいったんCIA職員として重大な任務につけば、恋人との自由な時間が制約されるのは当然。本件はそんなセーフハウスで働く、今は出来が悪いが将来はきっと伸びそうな若者マットをデンゼル・ワシントンの弟子役にすえたところがミソ。さあこの弟子は裏切り者の師匠から何をどのように学び成長していくの？

そんな風に本作のテーマを設定すれば、『デンジャラス・ラン』とわかったようなわからないような邦題にせず、原題の『SAFE HOUSE』のままでよかったのかも？

■□■いろいろな工夫ありだが、それがイマイチ・・・■□■

本作をあえて『デンジャラス・ラン』という邦題にしたのは、「悪に染まった伝説のCIAエージェントと運命を共にする、あまりに危険な32時間の逃避行！」というテーマを全面に押し出し強調するため。そして本作にはそのためのいろいろな工夫ありだが、それがイマイチ・・・。たとえば冒頭英国、M16の諜報員アレック・ウェイド（リーアム・カニングム）との間で鮮やかな「裏取引」を成立させて「ファイル」と呼ばれるメモリーチップを入手した百戦錬磨の元諜報員フロストがバルガス（ファレス・ファレス）率いる傭兵たちに追いつめられた挙げ句あっけなくアメリカ領事館に行くのはちょっと・・・。ジェイソン・ボーンならこれぐらいの危機は鮮やかに切り抜けるはずだから、フロストだって自ら領事館に逃げ込んだウラには何か秘策があるはず。私はそう確信していたが、そ

こには何のタネも仕掛けもなかったから少し失望・・・。

また「デンジャラス・ラン」が本格的に始まるのは、マットのセーフハウスにフロストを尋問するために送り込まれてきたCIAアフリカ支局長キャサリン・リンクレーター（ヴェラ・ファーミガ）の尋問班がいきなりバルガスたちの急襲によって全滅し、マットがフロストを連れて逃げ出したところから。しかし、手錠をかけただけのフロストの身柄を確保しながら、次の隠れ家まで逃走するというのは至難のワザ。そんなことがセーフハウスの管理人の仕事しか与えられていなかったマットにできるはずがないのは当然だ。しかし案の定、サッカー観戦の群衆がひしめくスタジアムの前で、フロストが「俺は誘拐された。助けてくれ！」とわめき始めると大混乱になり、結局マットはフロストを見失うことになるのだが、これも当然想定内・・・。



2012年9月7日(金)よりTOHOシネマズ梅田他全国ロードショー
©2012 UNIVERSAL STUDIOS. All Rights Reserved.

■□■ここにも設定の甘さが・・・?■□■

本作においてもデンゼル・ワシントンの存在感は光っているが、本作の設定がイマイチ甘いと思えるのは、フロストがなぜCIAの「裏切り者」と言われるまでになったのか?の説明が不十分なこと。また、フロストが入手したチップをどこでどのように使うつもりなのか、つまりどこの誰にいくら売りさばくつもりなのかがよくわからないため、いとも簡単に(?) マットをまいてしまった後のフロストの行動目標が不明確なことだ。アレックとの取引のためにやってきた南アフリカから脱出するためにはとりあえずパスポートが必要。そこで、長年の親友だったその道のプロのところへ・・・。

そんな発想をするのは当然かもしれないが、フロストがそんな発想で動くとなればそれくらいのことはマットだって、ましてやCIA作戦本部副部長のハーラン・ホイットフォード(サム・シェパード)やCIA主任情報工作員デヴィッド・バーロー(ブレンダン・

グリーンソン) だって推測できるのでは……。そんな中で起きるのがスラム街地区に住む偽造のスペシャリスト、カルロス・ヴィジャール (ルーベン・ブラデス) 宅での悲劇 (?) だが、そこから先は意外にもフロストとマットの間に何とも微妙な信頼の絆が……。しかして、本来の「師弟モノ」はここから開始していくことに……。

■フロストの「特技」も消化不良気味……■

映画は一作ごとに特徴を持たせなければダメだし、主人公も他とは一味違ったキャラクターを持たせることが必要。そこで考え出された本作におけるフロストの「特技」は、人の心を操ること。と言ってもフロストは9月12日に観た『危険なメソッド』(11年)における精神分析の権威フロイト先生ほどの心理学者ではなく、あくまで実践派。しかし、諜報員として活動するについては敵味方を問わず人の心を読む能力が不可欠だから、「人の心を操る天才」と言われるなら、それを見せてもらう必要がある。

ところが、本作でフロストがマットに対して仕掛ける心理戦は、CIAに忠誠を誓い本部からの指示を待つマットに対して「なぜ隠れ家バレたと思う?」と疑問を投げかけることだが、それぐらいの心理的揺さぶりなら誰でも可能。また、「お前は俺を守る義務がある」とプレッシャーをかける言葉も特別な「読み」があつてのことではないから、私に言わせればごく当たり前のプレッシャーがけ。もともと、こんな「心理戦」が少しずつ効いてきたため、「師弟モノ」の逃避行となる中盤からはお互いの信頼感が増していったのかも知れないから、そうだとするとやはりフロストは「人の心を操る天才」と言えるのかも……?

■意外にあっけないが、これが師弟モノの基本パターン? ■

1人の「主人公モノ」では主人公を殺してしまうとドラマが成立しないから、死亡したと思われても復活してくるのが常。しかし「師弟モノ」の場合は共に任務を成功させるハッピーエンド型もあるが、師匠の技量を弟子が引き継ぎ師匠は死んでいくパターンも多い。むしろその方が涙を誘う感動モノになるから、それが師弟モノの基本パターン? 「師弟モノ」としての展開が始まると同時に本作で始まるのが、CIAの中核での権力争いだ。本作ではCIA本部に詰めているハーラン、デヴィッド、キャサリンの三つ巴の権力争いが、ベテラン俳優の味わい深い演技の中で展開されるので、それに注目! CIA中核としては何としてもフロストを逮捕あるいは殺害して彼が持つチップを取り返さなければならないが、そのチップには何が書かれているの?

本作のクライマックスは、フロスト、マット連合軍(?) 対CIA本部から派遣されたデヴィッド、キャサリン連合軍(?)、さらにここで3度目の登場となる傭兵バルガスたちが入り乱れた銃撃戦になるが、その中で生き残るのは誰? その筋が見えてくると、「師弟モノ」の基本パターンを考えれば本作の結末に向けての予想は容易につくはず。したがって、その想定範囲内での展開を、本作ではじっくりと楽しみたい。

2012(平成24)年9月21日記

若松孝二監督を悼む

1)シネマルーム製作には①50作の選定②作品の分類と目次づくり③配給元へのメールでの原稿送付と画像提供の依頼④各作品への画像の挿入と頁数の調整⑤頁調整のための一頁コラムと各評論の余白部分へのコラムの執筆⑥表紙写真の撮影(選定)等々の行程がある。

『シネマ29』では『11・25自決の日 三島由紀夫と若者たち』を掲載するため画像提供の依頼をしていたところ、10月11日午後1時頃、若松孝二監督から電話があり、原稿の一部修正が要請された。監督自身が原稿を読み直接電話されたことに感激した私はすぐに修正し画像を提供してもらったが、何とその1週間後の10月18日の新聞各紙では東京都内でタクシーにはねられて重症を負った監督が17日76歳で死去したことが伝えられた。

2)1963年に『甘い罠』で監督デビューした同監督は過激な性描写の作品を数多く手がけ「ピンク映画の巨匠」と呼ばれ、1960年～70年代の大学紛争の時代に若者たちから支持されたが、私は当時の作品は観ていない。私が最初に観た若松映画は『17歳の風景 少年は何を見たのか』(05年)。「岡山のバット殺人事件」をヒントにした同作は「少年の逃走劇と戦後60年をムリヤリ結合・・・?」「ラストも難解!」「不親切なバック音楽も若松流・・・?」との小見出しでわかるように私の採点は

星3つだった(『シネマ8』300頁)。

3)しかし、「あさま山荘事件」の「実録」を伝えることができるのは、日本一過激な(?)若松孝二監督しかいない!そんな視線で観た『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程(みち)』(07年)は、美人女優、坂井真紀が出演していたこともあって星4つ(『シネマ18』56頁)。そして、「こりゃ必見!」「銀熊賞も当然の熱演に拍手!」「寺島しのぶもすごいが、大西信満も・・・」等の小見出しを使った『キャタピラー』(10年)は当然星5つとし、「政治的経済的に混迷する中、今や生き方すらきっちり定められない今ドキの若者こそ、こんな映画必見だが・・・」と書いた(『シネマ25』215頁)。

4)『海燕ホテル・ブルー』(11年)はイマイチだったが、次回作のテーマを三島由紀夫の割腹自殺事件にしたことにビックリ!三島由紀夫を取りあげたのは世の中を変えたいと思ひ行動する若者の心情を表現したかったためだが、「内向き志向」が強い今ドキの若者たちはこれをどう観る?それが大問題だが、何も決められない民主主義にあえぐ今の日本国を見ていると、結局何も変えられないかも。70歳を過ぎてなお衰えない創作意欲とその問題提起ぶりに期待していた私としては、今回の訃報は非常に残念だ。合掌。

2012(平成24)年10月24日記